

した中國人民によってこそ、遠くない將來に書かれることである。(一九六二、五・六) (狭間直樹)

### Русско-Монгольские Посольские

Отношения XVII века

Н. П. Шагина,

Москва, 1958. 173 c.

本書は表題の如く一七世紀の露蒙外交史研究に捧げられたものである。著者シャスティナ氏は現在モスクワのアジア・アフリカ研究所にあってこの方面にかんする研究に精力的な活動を示しておられる方である。わが國にあつては全く未開拓な分野に屬するが、ソヴェトにあつても同様のようである。本書はその意味でこの方面にかんする最初の專著であるといえる。事實、われわれは一七世紀全體を通じてロシアがモンゴリアと頻繁に交換していた外交使節のリストすら持つていない。しかしながらこの問題にかんする歴史的文献がないかという点と決してそうではない。從來露支交渉史にかんする諸研究中に折にふれ扱われていたのであつて、とくに革命以前のロシアの歴史學者を中心に解明せられつつあつた。例えば一七世紀の露支交渉史研究の場合、ロシアの東方、嚴密に言えばシベリア東部への外交政策と密接に結びついているが、この問題は最初シベリア史研究において扱われていた。これら研究にはモンゴルの汗や諸侯等にかんする若干のロシアの外交交渉の記述が含まれており、露支交渉史中の個々のエピソードとして數行、もしくは一章が費されてい

るにすぎない。それでもこの方面の研究は從來かなりの量の書物が發表されており、露蒙交渉史研究自体はきわめて不十分ではあるが、かなり豊富なビュリョタラフスキーを作成することができる。その中でも一八世紀の半官半民の歴史家ニョーラー G. Müller の「ロシア史集成」(Sammlung Russischer Geschichte, St. Petersburg, Band 8, 1763) ユンベントナー I. Fischer の「シベリア」(Sibirischer Geschichte von der Entdeckung Sibiriens bis auf die Eroberung dieses Landes durch die russischen Wafften, St. Petersburg, 1768) はいずれもシベリア史を扱いつながらる露蒙交渉史にかんする數多くのすぐれた記述に富むものである。とくにこの両者は、一七世紀を通じてロシアと密接な交渉をもつたモンゴルのアルタイン汗 Alyyn-Khans にかんする豊富な記述を含んでいる。そして史料的にもロシア政府の外交文書を利用していただけにその價值は高い。さらに降つては例のバツデー J. F. Baddeley の Russia, Mongolia and China. Being some record of the relations between them from the beginning of the 17th century to the death of the Tsar Alexei Mikhailovitch A. D. 1602—1676, etc. London, 1919, 2 Vols. はこの兩著を參考にし、バツデー自身が目睹したロシアの外交文書を利用して一七世紀のロシア、モンゴリア、中國三者の外交關係を概説したものである。しかしこれらはいずれも露蒙交渉史を専門に扱つたものではなく、いわばロシアと中國の外交關係を記述するに當つて、この兩大國の中間に位置するモンゴリアに必然的にふれざるをえなかつた事情がこれらの著者をして露蒙交渉史を扱わせたのである。シャ

ステイナ氏はこれら先學の業績を十分に参照しつつ、さらに自らモスクワの中央國立古文書保管局(ЦГДА)及び科學アカデミーレニングラード支院の古文書館(Архив ЛОИИ)などに保存されているこの方面の研究に不可缺のほう大なる古文書を涉獵し完成されたのが本書である。これら古文書がいかなる形式と内容をもつたものであるかはシャ氏の書にみえる豊富な引用文書からその一端を知りうるが、さらにシャ氏の書が出版された翌五九年に、Мария Алы по Истории Русско-Монгольских Отношений 1607—1636, Москва, 1959. (略稱 МРМО) が出版され、この書に収録された外交文書一三五通の原文に接することができるようになり、シャ氏の使用した外交文書の性質を明確に知りうると共に、この史料集に収録された文書がシャ氏の書の前半の基本史料であることが知られる。氏の書は一七世紀全體を通じてロシア、モンゴリア間に交換された使節のリストを作成することに中心がおかれているようである。本書の構成は

#### 序論

第一章 アルツン汗との外交關係(一六五〇年迄)

第二章 北モンゴリアの諸汗との外交關係の開始

第三章 一七世紀後半におけるアルツン汗との關係

第四章 ネルチンスタ條約の時期におけるロシア、モンゴル關係

以上本文は四章に分れる。序論においては、一七世紀の露蒙交渉は二つの時期と二つの系統に分類し得ることを指摘する。即ち一六〇八年、ロシアがアルツン汗 Артын кан—Алан хан (Müller, Fischer, Alyu Khan) と交渉を開始し、これからこれと交渉を中斷

するまでの約半世紀(第一章)と、ロシアとカルカ諸汗らの間にはじまった國境衝突の五〇年代からアルツン汗との交渉再開、中斷、ついで一六九一年、カルカ部の清朝歸屬までの約半世紀(第二、三、四章)の二時期と、使節交換の対象から、ロシアとアルツン汗間、ロシアとロシアがザバイカリア獲得以後衝突するに至った車臣汗、土謝圖汗、哲布尊丹巴胡土謝圖間の二つに分類されることとし、以下各章でその具體的な史實を克明に展開している。とりわけ著者が力を注いでいるのはロシアとアルツン汗間の交渉であり、他のモンゴル汗等との關係はいわばこの焦點を理解するに必要な程度にしか扱われていない感がある。アルツン汗というのは、カルカ・モンゴルのジャサクトゥ・カン Jасакту кан 扎薩克圖汗部に屬するホトゴイト Hotogoid 和托輝特部長の名である。アルツン汗の牧地はカルカ部の極邊、ウブサ・ノールを中心にイルティッシュ水源地方にまで勢力をはり、西方オイラートと地を接しており、ロシアともとても地理的に近い位置にあった。ロシアとアルツン汗の交渉は、一六〇一—一六〇二年、一六〇三年—一六〇四年、一六〇五年—一六〇六年、一六〇七年—一六〇八年、一六〇九年—一六一〇年、一六一一—一六一二年の間がとくに活潑であり、アルツン汗の名がはじめてロシア側の記録に現れたのは一六〇四年のことである。當時のアルツン汗は初代アルツン汗 Шорой-Убашин-Хонтайши (Шоной Убашин-Хунтайши 碩壘烏巴什渾臺吉)であつたが、かれのもとに三回にわたつて使節が派遣された(一六〇八年、一六〇九年、一六一〇年)。一六二一年に交渉は中斷された。この時期はロシアにとっては主としてモンゴルとロシアの善隣關係の樹立、及びアルツン汗領を横斷して遠く中國への交易路開拓が志向されてきたことが特色であるといふ。ついで一六三二年

——四五年の間は、すでに第二代アルツン汗オンボ・エルデニ（*О Мбо Эрдени* 俄木布額爾德尼）の時代であるが、オンボはロシアと親善關係を結び、當時モンゴリアに勃發していた封建闘争のためにツァーの保護下に入ろうと試みた。モスクワ政府もアルツン汗を臣下にうけいれ、かれをしてツァーに忠誠を誓わせようとした。事實形式的にはそのような宣誓は行なわれたが、實際上何らの結果ももたらさなかつた。というのは、アルツン汗はモンゴリア情勢の好轉のためツァーの保護を強いて必要としなくなつたからであり、兩者の交渉はまもなく断絶された（第一章）。五七年——七九年の間は、第三代アルツン汗ルブサン・タイジ（*Лубсан Тайжи* 羅維羅臺吉）の時代であつたが、アルツン汗國の權力失墜の時代である。その結果汗はロシアの援助を求めんとしたり、或は生活に迫られシベリア掠奪を行なつたりした。この時期にも相互の交渉はそのつど行なわれたが、多くの場合アルツン汗のシベリア掠奪に對するモスクワ政府の抗議とこれに對する汗側の辨解に終止している（第二、三章）。一六八一年に汗のもとへ派遣されたロシア使節を最後に、兩者の交渉は断たれ、一六九一年にはカルカ部全體がジュンガルの壓迫をさけて清朝に歸順し、ここに露蒙交渉史の幕が下りる（第四章）と云つたぐあいである。

以上の事實を著者は克明に史料を追つて詳述している。以下讀後感を二、三のべてみると、まず何よりも注目すべき發見は、ロシアモンゴル交渉史上におけるアルツン汗領の地理的重要さと、アルツン汗自身の一七世紀北西モンゴリア史に果たした役割についての認識をあらたにさせられたことである。ロシアがシベリアを横断して中

國への交易路を開拓する場合、もつとも利用さるべきルートはイルティッシュ河の水路を利用することである。一七世紀を通じてイルティッシュ水源地方にまで版圖を廣げていたアルツン汗領を通過することなくして中國に達することは當時としては不可能であつた。そこからロシアとアルツン汗との密接な交渉が行なわれたわけであるが、アルツン汗領にロシア文化が意外に入りこんでいること、そしてここから更に内外モンゴリアにロシア文化が浸透していったこと、この逆も可能であるが、ともかくこの國がロシアとモンゴリアの文化の接觸點にあつたことが著者によつて具體的に明かにされた。

そしてまた一七世紀末にジュンガル・オイラト勢力に打倒されるまで北西モンゴリアに雄視していたアルツン汗の史實を明かにすることによつて、從來全くブランクだつた明末清初の西モンゴル族史研究に貴重な貢獻をなすものであることは疑いない。しかしこの場合、著者の對象があくまで使節の往來を通じてみたロシアとアルツン汗との交渉史に限定されてしまつてゐるので、ここから西モンゴル族史を通觀することは困難である。その困難をもたらす最大の原因は、著者がこの時期のジュンガル・オイラト史にほとんどふれるところがないからである。例えば著者は一六九一年にアルツン汗がツァーに對しロシア政府の保護を求めた事實を傳えている（СГР. 30）が、一體何のためにアルツン汗がこのような申出をしたのかのべていない。しかしながら МРМО にこのときのアルツン汗のロシア・ツァー宛の信書が収録されており（*Док. No. 33*）、それによれば、アルツン汗はこのときジュンガル部長カラタラ（*Капакыра* 哈喇忽喇）と事を構えんとして準備しつゝあり、ロシアとアルツン

汗両者が共同してカラクラ挾撃作戦を提案したのであって、アルツン汗がロシアに保護を求めたのは實はこの作戰のためにロシアの援助を受けんとするためのセスチュアにすぎなかつたことを明白にしりうるのである。さらに著者はアルツン汗のこの申出がツアーによって拒否されたことをのべながら (CTP. 30)、その後アルツン汗がカラクラに對していかなる態度をとつたか何ものべていない。しかし事實はこのようなアルツン汗の行動を察知したカラクラも同年末ただちにツアーに使者を派遣し、ツアーの保護下に入るかわりにアルツン汗からの安全をロシアに懇願している (MPMO, Dok. No. 41)。ツアーはこの兩者の申出に對し、モンゴリア情勢不干渉の立場から一六二〇年末、勅令をもって今後アルツン汗及び全オイラートとの交渉斷絶を嚴命した (CTP. 30, MPMO, Dok. No. 44)。このアルツン汗とカラクラとの争いは結局アルツン汗の大勝利をもつて終る (MPMO, No. 70) が、著者はこのような事實については何もふれていない。あくまでロシアとアルツン汗間の使節の往來をるるとしてのべるにすぎない。ジュンガル部長がカラクラからバートル、センゲへと移るにつれてアルツン汗をしのごく大勢力に發展し、從來とは逆にアルツン汗を壓迫し、これに決定的打撃を與える一六五七——七九年の間に、著者はアルツン汗がロシアに保護を求め、使節を頻繁に派遣した事實を克明にのべながら、この間のジュンガル勢力に注意を拂っていないので、頻繁なる使節の往來の原因を十分に説明しえないでいる。さらにまた著者はアルツン汗とその宗主であつたジャサクト汗との關係 (欽定外藩回部王公表傳卷六三傳四七扎薩克多羅貝勒根敦列傳) についてふれるところがない。

ともかくいかにして一七世紀初頭に北西モンゴリアにおいて最強であつたアルツン汗の勢力が衰退していったかという説明をこの書に期待することはできない。その前に一體アルツン汗の勢力の基盤がどこにあつたかということも何ものべられていない。要するに、本書は一七世紀全體を通じてロシアとアルツン汗間に往復した使節のリストを作成することに中心がおかれていようである。以上のべたような筆者の疑問ははじめから著者の問題外であつて、勝手に筆者がないものねだりをしたのかもしれない。しかし本書に引用される史料が筆者のないものねだりを正當化するような重要な記述に富むものが多いからである。ともあれ著者によつて從來ブランクであつた明末清初の西モンゴル族史研究への有力な鍵が一つ與えられたことにならう。アルツン汗國の歴史を單にロシアとの外交關係のみでなく、ジュンガル・オイラート史との關係ともならみあわせて考察していくことが必然的に要求されてこよう。そして結局は露蒙交渉史は露支交渉史の一駒として扱われるべき運命に到達するのである。

(若松寛)